

日
の
果
て

日の果て

昭和二十三年二月二十日 印刷
昭和二十三年二月二十五日 發行
昭和二十三年十一月十日 再版印刷發行

定價百二十圓

著者 梅崎春生

發行者 東京都千代田區代官町二
片山修三

印刷者 東京都千代田區神田錦町三ノ一
井關好彦

發行所 東京都千代田區代官町二
株式會社 思索社

大同印刷・松本製本

日の果て

梅崎春生

日
の
果
て

目次

紐		七
行	路.....	三
あ	る	
願	末.....	三
蜺		三
日	の果て.....	三

紐

石で疊んだ廊下を靴で踏む堅い響きが、反響しながら次第に近づいて來た。そして房の前で止つた。

「あ、これを！」

さう言つたやうだつた。その聲と一緒に鐵格子の間に、新聞紙にくるんだ小さな包みが押し込まれた。包みは鐵格子の横棧に二三度ひつかかりながら房の床にぱさりと落ちた。

壁に背をもたせてうつらうつらしてゐた鬼頭はその音でハッと眼が覺めた。その時鬼頭が見たものは床に落ちた白い紙包みと格子の外に立つ黒服の男の姿であつた。男の腰には短い警察官用の短劍がキラと光つた。鬼頭が思はず身を起しかけた時、男はへんに黄色い顔を格子の間からちつと鬼頭に向け、そしてその姿はあわてたやうに其處を離れた。堅い靴音は少し亂れながら、再び元の方向に戻つて行つた。理由の判らない不吉なものにふと鬼頭は怯へながら、身體を壁にずらして紙包みに手を觸れた。濕氣を含んだやうな柔軟な重みが指に感じられた。

（これは何だらう。何の爲に投げ入れられたんだらう）

指が少し慄へて紙ががさがさと鳴つた。紙の中から出て來たものは、綺麗にたたみこまれた一本の青い絹紐だつたのだ。

「紐が！」

思はず叫びかけて鬼頭はあわてて口をおさへた。鬼頭の眼はその時、同房の向側の壁に膝を抱いた男の視線とびたりと合つた。

紐は鬼頭の指からすべつて、膝から床に重く垂れくねつてゐるのである。

☆

六車（と言ふのがも一人の男の名であるが）は、紙包みの中から絹紐が生き物のやうに床に這ひ流れた瞬間、ぞつとする程の戦慄が背筋を奔り抜けるのを感じた。すべて直線で囲まれた此の狭い世界の中に、それは妖しく微光を放ちながら、鬼頭の膝にまつてゐるのだ。それはいきなり肉體に響いて来る不快な衝動をまじへてゐた。六車は乾いた唾を嚥みこみながら、思はず手を伸しながらあへぐやうに呟いた。

「そ、それは何だね」

彼は、鬼頭が瞬間の放心から覺めたやうにぎよつと身體を堅くして、あわてて絹紐を拾ひ上げるのを見た。紐はその形で丸められたまま、鬼頭の懷に押込まれた。

「絹の紐だよ」

鬼頭の顔は折檻を受けた幼児のやうな表情を浮べてゐた。そして片掌をしつかり懷の上にあててゐた。そしてそれ切り二人は黙りこんだまま、探り合ふやうにお互の顔をみつめてゐた。房内の温氣がこもるやうに高まつて來た。

暫くすると鬼頭は急に頭を垂れて膝の間に埋めた。そして長いことそのまま動かなくなつた。

泣いてゐるのではないか。六車は神経質な眼を見はつたまま、壁に背筋をぐりぐり押しつけながらさう考へてゐた。

☆

房の外では戦争の嵐が吹き荒れてゐた。

しかし外界と此處とは、厚い混凝土の壁と鐵格子で隔てられてゐた。ただ此の房の上の方に小さな窓が外にむいて開かれてゐた。

それは人の背丈よりもつとつと高かつた。そんな小さな窓にも頑丈な鐵棒が三本ほどはめ込まれてゐた。そこからは區切られた青空が見えた。音が其の窓から入つて來た。それは電車の軋る音でもあつたし、萬歳を叫ぶ人々の行列らしい音でもあつたし、かけ忘れたラヂオらしい音楽でもあつた。それらの音が雜然と沈み込む暗い房の底で、二人の男は默然と膝を抱いて向き合

つてゐた。

午後になると必らず六車は呼出されて房を出て行つた。そして一時間程経つて戻つて來た。

そんな時の六車の顔は汗いっぱいになり、眼が獣のやうにぎらぎら輝いてゐた。房の床にくづれ落ちると、肩で荒い呼吸を支へ、あえぐやうな呻きを口から洩らしてゐるのであつた。その姿を見る度に鬼頭の胸にはある畏れが突き上げて來た。

鬼頭は此處に入れられて以來、一度も呼出されない。何時になつたら取調べが始まるのか數へて見るともう半月も経つて、入房當初の剃刀をよく當てたすべすべした頬には、黒いちぢれた鬚が密生し始めてゐた。

☆

格子から投込まれた絹の紐を一目見た時、鬼頭はいきなり心臓をぐさと掴まれた氣がしたのである。

彼はある軍需會社の營業部の主任だつた。突然ある朝刑事がやつて來て彼を拘引した時。彼がさほどあわてなかつたと言ふのも、彼の會社での仕事と言ふのが關係筋に附届けをする事であり、その關係筋と言ふのが監督官や管理官や地方役人や、警察官だからであつた。彼が口を割れ

ば此の土地のそれらの人々は皆收賄の罪に問はれる筈であつた。彼はその朝おるおると戸惑ふ妻に、何でもない直ぐ済む事だ、と一言残して拘引されて來たのである。妻の父も、此の土地で警察署長をやつてゐた。

だから鬼頭は救ひの手を信じて疑はなかつた。その救ひがどんな形で現はれるのか、それを待つて半月経つた。

あの時鐵格子に黄色い顔を押つけてちつと彼を凝視したあの巡査は、彼が見覺えがない男だつた。何時もの巡査とは違つてゐた。そして彼がふと脅えながら指に拾ひ上げたものがあの冷たいずつしりした絹紐の塊だつたのだ。

（己の口を割らせない爲には、己を救ひ出すよりも己を殺した方が早いのだ）

それがいきなり頭に來た。そして六車の神經的な鋭い視線に堪へながら、暫く惑亂しようとするものを支へてゐた。そしてがつくり頭を落すと、臉のうらにさまざまな人の顔が浮んで來た。人亂れた顔々の中に、思ひ詰めたやうな妻の顔がひとしほ大きく浮び上つて來た。

☆

その日も夕方近くになつて、六車は呼出されて出て行つた。暫くすると變に靜まつた通路の屈

折を抜けて、呻吟や叫喚が幽かに此の房まで聞えて來た。それは毎日のことであつたが、音が幽かであればある程、鬼頭には取調室の六車の姿がヴィヴィドに思ひ浮べられるのであつた。

（己は死なないぞ。己は死なないぞ）

そんな事を呟きながら、鬼頭は懷の紐をしきりにまさぐつてゐた。

やがて六車は汗みどろになつて房にもどつて來た。房に入ると一時に氣力を失ふらしく、床にうづくまつて犬のやうに荒々しくあえぎつづけてゐた。その細い肩や腺病質的な横顔を眺めながら、鬼頭は此の男を支へつづけてゐる氣力とは一體何であらう、とふと訝るのであつた。さう訝かると直ぐ、彼は今日絹紐を見た時の六車の瞳のいろを想出した。それは乾いてキラキラ光る瞳だつた。それがまつすぐ彼にそそがれてゐたのだ。

（此の男はあの時、どんな事を感じてゐたのだらう？）

鬼頭は六車から眼を外らすと、斜めに小窓を見上げた。昏れかかつた青空を切り取る三本の鐵棒が、浮き上るやうに彼の目にしみて來た。

☆

夜、うすい毛布にくるまつて二人は寢てゐた。消燈後のくらがりの中から、鬼頭は低い聲で聞

いた。

「お前は、政治犯なのか」

うん、と暫くして六車の返事が戻つて來た。鬼頭は更に問ひを重ねた。

「毎日、何故打たれてるんだね」

返事は無かつた。長いこと沈黙がつづいてゐた。もう眠つたのかと鬼頭が寝がへりを打とうとしたとたん、六車のやや早口な聲音が耳の側でした。

「俺が今白狀すれば、皆駄目になるんだ。俺の白狀が一日遅れば遅れるだけ、すべてが有利になるんだ。俺はさう思つて齒を食ひしばつて辛抱してゐるんだ。今日だつて、俺がちつと堪へたばかりに、何人かが命をたすかつてゐるのだ。何もかもうまいこと行つてゐるんだ」

急に烈しい呼吸使ひが耳の側で亂れた。

「しかし——俺は白狀してしまふだらう。明日か、明後日か、それは判らない。俺はあの苦痛には堪へられないのだ。聲を立てまいとしても聲が出てしまふ。——頭がくらくらになつてしまふのだ」

聲がとぎれ、深い溜息がそれにつづいた。鬼頭は毛布を顎にまで引上げながら、屈折した廊下